

会報 はるかな友

100年の絆

第23号 日本とアルゼンチン

1999.1.19 発行 いま新しい時代へ



新年ご挨拶

斎藤英四郎会長 高村正彦外務大臣 1
サンチス・ムニョス駐日アルゼンチン大使 2



友好100年 秋篠宮ご夫妻、小淵総理、
メネム大統領 P. 4



大統領の贈物 長田小のカミニート P. 5

特集：修好100周年を祝う

1	大統領の訪日、時々刻々	4
2	長田小「カミニート」物語	5
3	盛況だった「アルゼンチン総合講座」のまとめ	6
4	タンゴとフォークローレ、史上空前の花盛り	9

送別の会：さよなら名大使とポリーさん 3

現地速報：アルゼンチンの政治と経済 11

特別記事：素顔のピアソラ (2) 14

新著紹介：「アルゼンチンと日本－友好関係史」ホセ・サンチス・ムニョス著 15

協会事務所の移転.....16 文化行事.....16

お知らせ.....18 人事往来.....19

社団法人 日本アルゼンチン協会

発行人 野村秀治 編集人 渡部 透

〒100-0011 東京都千代田区内幸町1-2-2 日比谷ダイビル

電話 (3501) 4684 FAX (3595) 3932

新 年 ご 挨 拶

○ 斎 藤 英四郎 会長

協会員のみなさま、明けましてお目出とうございます。

昨年、地球の両サイドで盛大に行われた日本アルゼンチン修好100周年の記念行事は、多くの成果を得ていまや、終幕に近づいています。

これらの多彩な行事は、ただ単に両国の100年におよぶ絆と共に祝うのみならず、各界の識者、協会員のみなさまにより、両国の繋がりの実態が多角的に、科学的かつ実証的に研究され、認識がさらに深まりました。政治、経済、国際協力、移住、文学、音楽さらには生活文化など各分野での新たな発見もありました。これらを通じて両国の絆は、いかに強く固いものかが再認識できました。

今年は、両国友好の第2世紀における最初の年です。

ユーロの誕生は、メルコスールそしてアルゼンチンの経済的役割を高めていくものと考えられます。わが国との繋がりは今後、ますます重要なものになります。

みなさまのご健勝をお祈りするとともに、引き続くご協力を願いします。



○ 高 村 外務大臣

新年に際し、日頃我が国とアルゼンチンの間の交流促進に尽力されている日本アルゼンチン協会の皆様に御挨拶申し上げます。

昨年は日本とアルゼンチンの間で修好通商航海条約が署名されて100周年という佳節の年に当たりました。両国では、100周年を記念して、様々な記念事業が盛大に実施されました。特に、9月の秋篠宮同妃殿下のアルゼンチン御訪問及び12月のメネム大統領国賓訪日の際に開催された記念式典は、そのクライマックスというべきものがありました。日本アルゼンチン協会の皆様にも様々な形で御協力頂きましたことに対し改めまして御礼申しあげます。

政府としても、今後の新たな100周年に向けて、この100周年の機会に生まれた日本・アルゼンチン関係増進の機運を生かし、両国間の様々な分野における交流と相互理解



の一層の進展に向けて、更なる努力を行っていく所存であります。

最後に、日本アルゼンチン協会の皆様の一層の御発展と日ア友好協力関係の益々の発展を心からお祈りして、私の年頭の御挨拶とさせて頂きます。

○サンチス駐日アルゼンチン大使

アルゼンチンと日本はたいへん良き両国関係のもとに、1999年を迎えるました。私達の前には未来への可能性を秘めた輝かしい道が広がっています。

1998年、両国は修好100周年を迎えるました。昨年は修好100周年を記念して様々な行事が行われ、両国間の長きにわたる友好を祝う年となりました。

日ア修好100周年は、両国史において特筆すべき出来事です。新しい世紀を目前に控え、両国間の相互理解が深まり、あらゆる分野での両国間の絆がさらに強固なものとなりました。

この度、私は約5年にわたる駐日アルゼンチン大使としての職務を終えて、帰国することになりました。日本での5年間は大変実り多いものでしたが、この間、日本アルゼンチン協会からは常に変わらぬご協力を様々な分野で頂きました。協会は、大使としての私の仕事をいつも支えて下さり、アルゼンチン大使館と日本社会をつなぐ橋渡しとしてかけがえのない存在でした。個人的にも、妻のポリーと共に、個人会員及び法人会員の皆様が示して下さった職務への熱意と献身に心から謝意を示したいと思います。

末筆ながら、日本アルゼンチン協会の会員の皆様に1999年のご多幸を心よりお祈り申し上げます。



1999年の協会行事予定

- | | |
|---|------------------|
| 1月：サンチス・ムニョス大使およびポリー・フェルマン夫人の送別会 | |
| 2月：協会事務所移転 | 3月：日本アルゼンチン交流史発行 |
| 4月：実用スペイン語講座開設 | 5月：協会第43回総会 |
| 6月：ペヘレイ・ツアなどを予定しています。ほかに全日本タンゴ・ダンス・コンテストなどの企画もあり、会員のみなさまのご意見、ご希望を事務局までお寄せ下さい。 | |

さよなら名大使とポリーさん

サンチス大使ご夫妻の送別会

「多くの大使のなかでも傑出した大使でした。日常業務の傍ら「アルゼンチンと日本一友好関係史」を出版され、修好100周年の記念行事では見事な手腕を發揮され深く感銘を受けました。ご夫人のポリーさんはピアノによるアルゼンチン音楽の紹介の



ほか、昨年7~8月には三笠宮寛仁殿下とともに北海道から沖縄まで11ヶ所の障害者療養所、老人ホーム、ハンセン病療養所で、日本縦断ピアノ・コンサートを奉仕され、頭がさがる思いです」藤本協会副会長の送る言葉。

ご夫妻への送別会は1月13日、日本海運俱楽部で当協会が主催し、100周年記念事業組織委員会、日本商工会議所、大来財団の後援のもとに、80数名が参集し、盛大に名残を惜しんだ。

大使は歴史家らしく着任の1993年から年代ごとに両国関係の足取りを振り返り、いまや両国の友好関係は史上最高のレベルにある、と強調された。近藤鎮雄副会長の音頭のもとに、カルピス(株)と川重商事から寄贈されたアルゼンチン・ワインで乾杯した。

会場には、大使のお骨折りで実現した、長田小学校へのメネム大統領の贈物である特製のアルゼンチン国旗が披露され、金糸で刺繡された中央の太陽の像がひときわ輝いていた。

(専務理事 野村秀治)

事務局からのお願い

「個人正会員および個人賛助会員」募集

個人会員制度の概要は次のとおりです。

- | | |
|---|-------------|
| ①☆正会員（定款上総会の構成員。議決権有り） | 年会費 ￥10,000 |
| ☆賛助会員（定款上総会には非構成員。議決権なし。
その他は原則として正会員に準ずる） | 年会費 ￥ 5,000 |
| ②会報：当協会の発行する「会報」を年4回お届け（無料）することにより、日ア間の最新情報を政治、経済、文化などに亘って提供します。 | |
| ③文化活動ないし演奏会などの催物のご案内、割引案内を行い、ご希望の分野にご参加（実費徴収）いただきます。 | |
| ④定期総会のほか「親睦会」を開催し会員相互および在京大使館との交流を計ります。
アルゼンチンに関心の深いご友人、関係先の方々を、是非ともご勧誘ください。
事務局にご一報あれば加入申込書を、ご本人あて郵送いたします。 | |
| ⑤郵便局振込口座 00120-6-581381 | ⑥住友銀行 日比谷支店 |

普通 215-99570

特集：修好 100 周年を祝う

1. 大統領の訪日、時々刻々

河 崎 勲

国賓のメネム大統領は、大統領としては3度目の訪日になる。小柄でやせ型のタイプであるが背筋を真っ直ぐに伸ばし、浅黒い顔は精悍そのもの。しかし表情は終始にこやかで、人をそらさない巧みな政治家であった。

12月1日 午後迎賓館に落ち着く間もなく、国立競技場へ。サッカーの欧州1位と南米1位が事実上の世界一を決めるトヨタカップを観戦し、レアル・マドリードのラウル選手の決勝ゴールに身を乗り出していた。試合のあとは大統領の希望ですし屋へ。同行の令嬢は日本ファンで、ブエノスアイレスでは週に2回は刺身、すしを楽しむという。

12月2日 皇居に天皇陛下をご訪問。お会いになるのが4度目というお2人の会話は最初から親密で、陛下のアルゼンチンご訪問の思い出やラプラタ博物館、パタゴニア開発、両国近代化の過程でそれぞれに外国人が果たした役割などが話し合われたという。タンゴも話題になった。陛下がフランシスコ・カナロや藤沢嵐子のことについて語られ、すっかり打ち解けたダンス好きの大統領は、「娘にもタンゴを踊れと言っているのですが、娘はどうも」と笑っておられた。

この日は、経済団体の歓迎昼食会のあと、帝国ホテルでの両国修好 100 周年記念式典に出席、長田小学校児童の「カミニート」には感動の様子であった。

12月3日 アルゼンチン経済投資セミナーでは、予定時間はるかに越えて演説したが、アルゼンチンへ投資をという生な表現はしない。日本のみなさん、もっとアルゼンチンに来てくださいという巧みな言い方であった。午後の首脳会談では、大統領が、日本の貿易出超を指摘し、アルゼンチン農牧製品の輸入を要請したのに対し、アルゼンチン通の小渕総理は、アルゼンチンが日本人のニーズに応えるようなきめの細かい產品を送り出すことを示唆、与謝野通産相は、アルゼンチンワイン、とうもろこしの輸入の増えていることを指摘した。

12月4日 天皇陛下が迎賓館でお見送り。大統領は、「ああそうだ」と、お付武官に部屋まで取りに行かせて、タンゴのCD5枚を陛下にあらためてプレゼントされた。大統領はこの日名古屋のトヨタ自動車工場を見学、昼食で出されたアルゼンチンワインを口にして、「いいものは全部輸出にまわってしまうので、日本にこないところなうまいアルゼンチンワインは飲めないね」と笑わせておられた。

重症のアルゼンチン経済を見事に立て直し、そのためには政敵を次々と追いやった強腕の政治家が、その自信と覇気、同時に、人の心を掴む巧みさをあますことなく示した4日間の日本公式訪問であった。

(当協会理事)

2. 長田小「カミニート」物語

野 村 秀 治

100周年記念式典につづくレセプションの冒頭。メネム大統領はじめアルゼンチンの賓客を歓迎する長田小学校児童56名による合唱「さくら」と「カミニート」の後に、シナリオにないことが起こった。

割れるような拍手の聴衆の中から突然、側近が大統領に白い包みを渡した。大統領はつかつかと指揮者、麻生真貴子さん（小6）に近づき、抱きかかえるように挨拶をして白い包みを贈った。聴衆の拍手は、さらに一段と高まった。

長田小学校全校児童による「カミニート」の齊唱は、1988年6月2日、同校校庭での「アルゼンチン友好碑」の除幕式に遡る。タンギートこと木田寿司協会事務局長（当時）がこの曲を紹介し指導された。その後、毎年6月の第一土曜日を「アルゼンチン友好の日」とさだめ、この歌が全校児童により連綿と歌い継がれてきた。

昨年6月6日、サンチス・ムニヨス大使ご夫妻はゴメス・アギーレ文化担当参事官を伴って、恒例の祭典に参加された。ちょうどワールド・カップの対アルゼンチン戦直前であったため、大使は児童達にサッカー・ボールを贈り、著名なピアニストであるポリー・フェルマン夫人はアルゼンチンの名曲を聞かせてくれた。児童たちは「カミニート」を精一杯歌ってこれに応えた。あの午餐会で大使夫妻に、東京での式典にこの児童たちの「カミニート」を大統領に披露しては、と秘かに問いただした。お二人とも「それは、すごいことだ」。

手始めは10月24日（土）、池袋サンシャイン・シティで開催された「アルゼンチン・フィエスタ」でのデビュー。全校児童380名による「カミニート」が立派に一般公演された。しかし式典会場の帝国ホテルのスペースは、50名程度で一杯という。さらに一番のスペイン語の歌詞を追加する必要が指摘された。

長田小の11月は一種のパニックに陥った。メンバーの選定とスペイン語の特訓。1・2年生の児童それぞれ8名も、長いスペイン語の歌詞を必死になって暗記した。放課後特訓が終わる頃はもう夕闇。連日にわたり、どの家族も学校へわが子を迎えてやってきた。文字通り教師とPTAが一体となって、史上初の難問にいどんだ。

12月2日ひる、2台のバスで子供たちがやってきた。大正琴伴奏の「さくら」に続いて見事な「カミニート」の合唱。大統領のみならずアルゼンチンの賓客も小声で唱和し「完璧なスペイン語で、思わぬ感動（代表団員）と、祝典の雰囲気は冒頭から最高潮に達した。

大統領の贈り物は、特別に刺繡が施されたアルゼンチンの国旗だった。それはサンチス大使の心憎い配慮の賜であった。長田小は長く学校の宝として保存するという。しかし、それにも増して、大きな宝は、あの「カミニート」が児童一人ひとりにもたらした一生の想い出ではないだろうか。
(当協会専務理事)

3. 盛況だった「アルゼンチン総合講座」のまとめ

河 崎 勲

日本アルゼンチン修好100周年を記念して、組織委と当協会などが主催した早稲田大学オープンカレッヂ寄付講座アルゼンチン総合セミナーは盛況で、毎回約220名が受講した。48名の皆勤優等生は、大隈講堂横の美しい庭園にあるガーデンハウスで開かれた最終日の終了パーティで、一人ずつサンチス大使と握手して大学から修了証書を授与された。クラシックピアニストの大使夫人が、ピアソラやヒナステーラの名曲、アンコールに「さくら」と「ラ・クンバルシータ」などを演奏し、自らのユーモラスな日本語の曲目紹介で会場をどっと沸かせた。アルゼンチンワインありオードブルあり、記念写真を撮りあうフラッシュが光り、さざめきが続いた。11回の講義のさわりをご紹介する。

* サンチス・ムニョス 駐日大使「アルゼンチンの歴史と概観」(9月12日)

両国は、地理的に遠く領域をめぐる論争もなく調和の取れた関係が続いてきた。100年前の修好条約は、日本にとっては初めての平等条約であった。アルゼンチンが譲渡した2隻の軍艦は日本海海戦で大活躍した。多数の日本人が移住してきたが、他の国と違ってアルゼンチンでは差別がなかった。アルゼンチンは日本人のまじめさ、正確さ、組織の尊重を学び、日本は、女性の尊重、他人の人権尊重、オープンさを学べばよいのではないか。

* 野村秀治 日ア協会専務理事「100年の盟友—日本海海戦からワールドカップまで」(9月19日)

日露戦争開始前の日本は、のどから手が出るほど軍艦が欲しかった。アルゼンチンがイタリアで建造中の2隻に目をつけ、日本外交官がクリスマスイブの深夜アルゼンチン外相自宅に乗り込んだ。翌日の臨時閣議でアルゼンチン大統領は、2隻の日本譲渡を決定した。アルゼンチンは、第2次大戦中ぎりぎりまで中立を保ち、戦後は日本に大量の食糧を援助した。2002年ワールドカップ日本開催を支持した。日本は、近年アルゼンチンに対する最大の経済援助国であり、またマルビーナス戦争の際は経済断交の圧力に応じず独自路線を貫いた。両国は世界でもユニークな盟友関係を持つ。

* 藤本芳男 元駐ア大使「マルビーナス戦争秘話」(9月26日)

英国は、英國人が発見したといい、アルゼンチンは、スペインから領有権を継承したと主張する。1982年、両国の宣戦布告のないまま自衛権の発動として戦争が始まり、70日あまりの戦闘で、1,000人を超す犠牲者を出した。戦争の背景には、アルゼンチンでは、長期独裁体制と経済悪化に対する国民の不満、英國では植民地経営の矛盾という、それぞれに困難な国内事情があった。両国は必要のなかった紛争をした。アルゼンチンは島に対する領有権を放棄したわけではなく、問題は残った

ままである。

* 松下洋 神戸大学教授「ペロンとエビータ」（10月3日）

ペロニズムは、ラテンアメリカに多く見られるポピュリズムの一例である。ポピュリズムは、民族主義の実現と社会的不平等の是正を目指した運動で、ペロンの具体的政策は、労働者の保護、公共事業の国有化、反米自主外交であった。ペロンのカリスマ性が大であったことや、労働運動の役割が大きい点は他のポピュリズムと違っている。エビータ夫人は、救貧政策の他、婦人参政権など女性の地位向上を推進し、大衆とペロンの橋渡しとして大きな役割を果たした。ペロン亡きあとのペロニズムは変貌し、メネム大統領が市場原理の重視、民営化、対米強調を進めている。

* 小林晋一郎 東銀リサーチ・インターナショナル研究理事「経済復活とメルコスール」（10月17日）

肥沃な土地と温暖な気候に恵まれた農牧は次第に人手を必要とし、アルベルディは「距離と人口の少なさが敵である」と移民受け入れを提唱した。冷凍技術、鉄道、針金の導入は産業を飛躍させた。同時に大土地所有と小規模所有を生んだ。輸入代替工業化の時代を経て第二次大戦直後は米ソに次ぐ第3の金保有国となった。その後の挫折の時代は、民生と軍政の繰返し、統制と自由化の繰返しで、89年のインフレは月200%に達した。メネム政権は、自国通貨をドルとのリンクで安定させてインフレを収束し、産業を民営化し、メルコスール（南米共同市場）を推進している。

* F・ラス 駐日ア国大使館経済参事官「日本とアルゼンチンとの貿易投資」（10月24日）

日本・アルゼンチン間貿易は、1980年代に下落したが、1990年代に入り回復した。アルゼンチンの対日輸出品目は、魚介類、原料アルミニウムと飼料である。額は小さいが、ワイン、木材チップの輸出は急速に伸びている。近年中に日本の投資で成長が見込まれる分野は、農牧・漁業、食料品、自動車、通信、ホテル、石油化学などである。

* マルタ松下 同志社大学教授「赤ワインの秘密と生活文化」（11月7日）

私の故郷メントーサでは、どんな家にも葡萄の木がある。毎日曜日決まった時間に決まった教会にミサに行くが、その時は小さなパンとワインを口にし、最後の晚餐のキリストの言葉を偲ぶ。家族みんなで食事を楽しみワインを飲むが、無理強いしないし食べながら飲むので、日本のように酔っ払いはない。おしゃべりをエンジョイする。結婚式でもキリストの教えに従うという意味で赤ワインを使う。結婚式は夜で、格式の高い家ほど花嫁が花婿や列席者を待たせる。旧家のわが家では母が長時間遅れることに固執、せっかちな新郎（松下教授）はいやがった。「結局30分遅らせました」（教室中大爆笑）

* 畑恵子 早稲田大学教授「アルゼンチンの女性史」（11月14日）

ラテンアメリカ全体に、女性に聖母マリアの慈愛と包容に満ちた母性を求めるマ

リアニズムの道徳規範がある。教育の父サルミエント大統領は、女子教育の育成にも力を注いだが、意図するところは、近代化時代の「母親」の育成にあった。エビータも女性のためにつくしたが、大統領の「妻」と貧困層を対象とした「国民の母」としての役割に徹した。70年代から80年代の軍政下の弾圧に抗した「5月広場の母達」の運動が軍部に抑圧されなかったのは、「母性」の立場に基づいたものだったからである。

* 野谷文昭 立教大学教授「アルゼンチンの文学」（11月2日）

マルティン・フィエロのようなガウチョの文学もあるが、アルゼンチン文学の主流はギリシャ・ローマの西欧の流れを汲んだ都市文学と位置づけるべきである。ドン・セグンド・ソンブラのようなガウチョ文学が再評価された時期もあるが、都市文学の流れは変わらず、その頂点にはボルヘスがいる。ボルヘスは西欧の古典を良く学び教養の高いユニバーサルな作家で、知的なテーマをとりあげた。

* 齐木茂治 100周年記念事業組織委員会事務局長「食糧危機とアルゼンチン」（11月28日）

世界人口が増加する中で、食糧の面では、先進国と開発途上国の格差が著しく、世界の食糧分配が難問となっている。食糧自給率の低い日本は、国際紛争や異常気象等で輸入が困難になった場合に備えて食糧供給国との良好関係を保つことが重要である。アルゼンチンは、世界第5位の食糧生産国であり、米国は別格として、あのカナダ、豪州、アルゼンチン、ブラジルの中では、総合点では、最大の潜在食糧供給国である。

* 帆足まり子 日本ラテンアメリカ文化交流協会会長「folkloreとタンゴーアルゼンチンの愛と魂」（12月5日）

ユパンキは来日した際、演奏会以外ではギターを手にしなかった。日本ではどこへ行っても音楽が流れていて邪魔だ。音楽のないところをと言うので時計だけの喫茶店へ連れていったら、これも音楽だと言っていた。folkloreは、北西部、中央部のパンパ、バラナ川沿い地方、西部地方の4地域に大別され、それぞれに素晴らしい音楽を生んでいる。タンゴの発生は、アンダルシア説、カリブ説、folklore説、アフリカのガンドンベ説等さまざまの説がある。映像・音楽利用の楽しい講義であった。

（当協会理事）

4. タンゴとフォルクローレ、史上空前の花ざかり

荻 原 正 弘

1998年、修好100周年の年は、本国よりタンゴとフォルクローレのアーティストが大挙訪日し、史上空前の盛況ぶりを呈した。「100周年記念事業組織委員会」は、そのほとんどを記念事業としたのであるが、それをまず列挙してみる（記念事業承認分）。

1月13日—4月1日	マウリシオ・マルチェリ楽団	(58都市、60公演)
4月10日—4月22日	タンゴ・パッション(セクステト・マヨール)	(東京、16公演)
5月10日—7月10日	エンリケ・クッチーニ楽団〈第1次〉	(31市区、43公演)
5月19日—5月23日	オルケスタ・ティピカ東京／エルネスト・バッファ	(5都市、6公演)
6月20日—7月20日	タンゴ・ヴィーナス(エドガルド・アーニャ)	(21都市、25公演)
6月29日—7月8日	バレエ・アルヘンティーノ(アティリオ・スタンホーネ)	(3都市、6公演)
8月3日—8月7日	リト・ビターレ/トリオ・カンタウトーレス	(3都市、3公演)
8月4日—8月6日	スサーナ・リナルディ〈真夏の夜のタンゴ〉	(3都市、3公演)
8月7日—	アリエル・ラミーレスのミサクリオージャ	(東京、1公演)
9月9日—9月16日	ブエノスアイレス・ネオタンゴ(ホルヘ・ラトーニ)	(4都市、5公演)
9月18日—10月15日	ファン・ダリエンソ楽団	(20都市、25公演)
9月19日—12月21日	エンリケ・クッチーニ楽団〈第2次〉	(57市区、74公演)
10月6日—10月20日	ノルベルト・ラモス五重奏団	(5都市、7公演)
12月2日	ファン・デ・ティオス・フィリベルト・アルゼンチン国立オーケストラ	(東京、1公演)

1. タンゴ

以上の中の10の来日タンゴグループのうち、バレエを含めて4つの団体がタンゴダンス・ショウの公演であったことは、昨今のダンスブームということに加えて、やはりアルゼンチンタンゴは音楽として聴かせる耳の芸術としてのみならず、目で見て楽しむ踊りの技と情熱のショウであることを強くアピールした。タンゴ・パッションにおけるペア7組、タンゴ・ヴィーナスの若手6組、ネオタンゴの日本人ダンサー古瀬陽子らの3組の踊り手達はいずれも官能的に踊ったが。特にファン・ダリエンソ楽団に同行した2組のダンサー、グラシェラ&クラウディオとマリア・ベレン&サンティアゴはその白眉であった。演奏面では、ヴァイオリンの名手マウリシオ・マルチェリは、8人の弦を入れてクラシカルなサウンドで新しいタンゴ表現をした。タンゴ・パシオンのバックを支えたセクステト・マヨールは、バンドネオンのホセ・リベルデリヤ以下名手揃いでこのショウを盛り立てた。鍵盤の魔術師エンリケ・クッチーニは、合計5ヶ月に及ぶチャリティーで日本中に笑顔を振りまいた。オルケスタ・ティピカ東京のステージには、現在最高のバン

ドネオン奏者の1人エルネスト・バッファが初来日して客演した。フリオ・ボッカとバレエ・アルヘンティーノには名ピアニスト、アティリオ・スタンポーネが、演奏のみならず、バレエ「タンゴ」の音楽監督も務めた。バンドネオンのカルロス・ラサリ率いるファン・ダリエンソ楽団は5人のバンドネオンをズラりと並べ、迫力満点のサウンドを聴かせてくれた。ノルベルト・ラモスも自身のピアノと共にアドルフォ・ゴメス、ティト・ファリーヤスの両バンドネオニスタとの息のあった伝統派タンゴを聴かせた。そしてメネム大統領に同行して来日したオスバルド・ビーロ指揮によるファン・デ・ディオス・フィリベルト記念アルゼンチン国立オーケストラは、9名の弦を含む17名編成でシンフォニックなタンゴを奏で、中でも第1ヴァイオリンのハビエル・ウェイントラウブは抜群に美しい天上の音楽を聴かせてくれ、3組のタンゴ・ダンスは、官能的なものと、クラシック・バーの優雅さとの融合をめざす新しいスタイルを披露した。

最大の話題の一つは、大物歌手スサーナ・リナルディの初来日で、ユネスコのアルゼンチン親善大使でもある元女優の彼女は舞台狭しと歌いまくった。上記リストにあがらなかった演奏家として、5月に国立アルゼンチン交響楽団の独奏者として来日し、アストル・ピアソラの「バンドネオン協奏曲」等を弾き、また6月にはミルバの「タンゴ・ピアソラ」にも出演した名手ダニエル・ビネリや、11月にカルテットで来日公演したバンドネオンのヴェテラン、ウゴ・パガーノ等がいる。

同様に、100周年記念事業としての日本人のタンゴ公演も、志賀清とティピカ東京のみならず、大浦みづき一チエ・タンゴー、関西タンゴフェス、池田光夫とロス・アミーゴス、香坂優、小原みなみ、門奈紀生とアストロリコ、高野太郎、清水百合等が競演した。100週年事業は今年の3月末まで続くのであるが、1月中旬から3月下旬までのバンドネオンのカルロス・ブオノ楽団（民音）、2月12－14日の小松亮太と鬼才ポーチョ・パルメルのバンドネオン狂宴（草月ホール）、そして2月23－28日のルイス・ブラボ演出、バンドネオンのリサンドロ・アドロベール音楽監督によるブロードウェイでロングヒットをした「フォーエバー・タンゴ」（青山劇場、テレビ朝日）をもって、1年中花咲いた記念事業としてのタンゴ・アルヘンティーノは幕を閉じるのである。

（日ア修好100周年記念事業組織委員会事務局コーディネーター 当協会員）

2. フォルクローレ

帆 足 まり子

1998年はアルゼンチンから多くの有名な民族音楽家たちが来日し、歴史に残る公演を果たした。

そのほとんどが初来日であったということも、日本アルゼンチン修好100年の年なればこそと言えるだろう。

8月は将にアルゼンチンの月とばかり、集中的なコンサートの開催となった。先ず、3日東京厚生年金会館大ホールでは、アルゼンチン現代民族音楽の鬼才、トップ・ミュージシャンでキーボード奏者「リト・ビターレ」率いるトリオの公演が始まった。共演のフルートのイサルアルデ、ギターのゴンザレス等と共に創り出すアルゼンチン民族音楽の持つリズムを駆使してのモダン感覚のフォルクローレの演奏はかねてからジャズ、クラシックの分野の人々にまでその名を知られているだけあって素晴らしいデビューであった。また「アルゼンチンのマリア」を歌い新境地を開いた歌手の「フリア・センコ」の特異な歌いまわしも好評を博した。作曲家達のグループ「トリオ・カンタウトーレス」は再来日で、日本ではファンも多く、その優しさの溢れた作品と歌声は聴衆の心にアルゼンチンの大地の魂を伝えるようであった。東京、名古屋、京都の各地で公演は開催された。

続いて8月7日、アルゼンチン音楽著作権協会会長であり、作曲家としても数々の名曲を創り出したピアニスト「アリエル・ラミレス」の初来日とその代表作フォルクローレのミサ曲「ミサ・クリオージャ」の本邦初公演が開催された。公演当夜の東京サントリー・ホールは一種の興奮に包まれていた。この曲が録音されたのは1960年、オリジナル・メンバーの「ロス・フロンテリーソス」の力強い歌声に感動したのを思い出した。近年は「ホセ・カレーラス」の歌唱で話題となっただ。当夜のソリストは「ハビエル・ロドリゲス」懐かしいギターのノルベルト・ペレイラ、ケーナのラウル・オラルテ、チャランゴのアンヘル・ベラスケス、パーカッションのオラシオ・ストゥライヘルのメンバーで、勿論大御所アリエル・ラミレスのピアノ演奏は圧巻であった。

(日本ラテンアメリカ文化交流協会会長、当協会員)

アルゼンチン政治・経済動向速報

小林 晋一郎

- 1998年10月28日から11月1日、メネム大統領はマルビーナス戦争後初めてアルゼンチンの元首として英国を訪問した。アルゼンチン大統領の英国公式訪問は1960年のフロンティシ大統領以来である。メネム大統領はブレア首相、エリザベス女王と会談、マルビーナス戦争の戦没者慰靈のためセント・ポール寺院を訪問した。企業家との集まりも開催された。マルビーナスの主権問題は議題から外されていた。12月、英国はマルビーナス戦争時に実施した対アルゼンチン武器輸出禁止措置を解除した。

- 11月24日、軍政下におけるよ幼児誘拐に関与した疑いでマセラ元海軍司令官は証言を拒否したことから、幼児誘拐・文書偽造などの容疑で逮捕された。マセラは1984年、軍政下での人権抑圧で終身刑に処せられたが、1990年にメネム大統領より恩赦が適用されていた。しかし、幼児誘拐は恩赦の対象外と解釈され告訴を受けていた。
- 11月29日、野党連合からの次期大統領候補を選出する為の公開選挙が行われ、デ・ラ・ルア（急進党総裁で現ブエノスアイレス市長）が勝利した。対抗馬であったマイヒデ（フレパソに属する下院議員）はブエノスアイレス州知事選に立候補することとなった。また、副大統領候補はチャチョ・アルバレスが指名された。
- アルゼンチンとチリの最後の国境問題であるパタゴニア氷河地域（Hielos Continentales）について、12月16日、国境画定に関する合意文書が両国大統領により署名された。98年10月にはエクアドル・ペルー間で57年続いた国境問題が解決、南米大陸で主要な領土問題が解消した。
- 12月、政府はIMFと1999年の経済目標で合意した。
 - ① 経済成長率は2.5～3.0%
 - ② 財政赤字29.5億ドルでGDPの1%以下
 - ③ 国立不動産銀行の民営化、石油公社の政府持ち株の早期売却
 - ④ 国立商業銀行であるナシオン銀行民営化の第1歩としての株式会社化
 - ⑤ 労働改革の推進（解雇基金など）
- 12月、懸案の税制改革法案が国会を通過した。
主要点は次の通り。
 - 1) 付加価値税
 - ① 未加工の食料品（牛乳、鶏肉、卵、野菜、魚介類など）と国内金融機関の貸出金利に対する税率を21%から10.5%に引き下げる。
 - ② 従来課税対象外であった民間医療保険（10.5%）、広告（21%）、ケーブルテレビ（10.5%）と課税される。
 - 2) 所得税（法人および個人）の最高税率を33%から35%へ引き上げる。
 - 3) 資産税の創設（資産の1%）。
 - 4) 海外への支払利子に対する源泉徴収税の引き上げ。バーゼル協定締結国は13.2%から15.05%へ、その他は13.2%から35%へそれぞれ引き上げる。
- 12月16日、世銀はアルゼンチン政府に対し総額27.5億ドルの借款供与を承認し

た。25億ドルは政府地方財政均衡、金融システム強化や社会政策に充当され、2.5億ドルは市の排水・洪水防止プロジェクト向けの融資である。世銀から国立不動産銀行の民営化など50以上の条件が課せられていると報道されている。

- 98年10月の失業率は同年5月の13.2%から12.4%へと減少した。
98年12月、従来から議論されていた外国銀行協会（ABRA）と地場銀行協会（ADEBA）が合併で合意、加盟銀行数60行、全国銀行預金の85%のシェアを持つ新生アルゼンチン銀行協会（ABA）が誕生することとなった。
- アルゼンチン地場民間銀行の外銀による買収が活発なところ、98年11月、イタウ銀行（ブラジル）が中堅銀行ブエン・アイレ銀行を買収、クレディ・アグリコル（フランス）がビゼル銀行への出資比率を34%から64%へ引き上げることを決定した。大手地場銀行で唯一外資の参入がなかったガリシア銀行につき、セントラル・イスパノアメリカノ銀行（スペイン）はADRにより10%の株を取得したとしてブエノスアイレス証券取引所に報告した。なお、ガリシア銀行株の51%はエスカサニ家、アエルサ家とブラウン家が保有している。
- 経営破綻し中銀より営業停止命令を受けていたマヨ銀行（ユダヤ系社会を営業基盤とし、98年3月には事実上倒産したパトリシア銀行を買収した）で、98年11月、シティー銀行は店舗の一部である54店舗と2000人の行員を受け入れることで譲渡契約書に調印した。残る25店舗がガリシア銀行他10行に譲渡された。
- 11月18日、アルゼンチン政府はドル建てグローバル債（金額10億ドル、期間7年）を発行した。経済省は当初、発行額を5億ドルで予定していたが市場の反応が良く、7億5千万ドルに引き上げ、さらに最終的に10億ドルとなった。
- 98年9月、政府は銀行預金に対する政府保証限度を拡大した。保証額を現行の1万ペソから3万ペソに引き上げ、同時に保証の対象となる預金金利も引き上げた。
(東銀リサーチ・インターナショナル 研究理事)

特別記事：素顔のピアソラ（2）

ピアソラは私に言った。「Musicaと呼んでくれればいいんだ」

河 崎 勲

私がテレビ取材したころのピアソラは、タンゴ生演奏のレストラン・シアター“ミケランジェロ”を根城にしていた。新曲「白い自転車」は、ここで発表された。1970年である。当時のピアソラ夫人メリタ・バルタールが歌った。ピアソラが一つ一つの曲を、演奏前に紹介して行くのだが、冒頭、「きょうは、テレビシオン・ハポネサの取材が花を添えてくれています」と言ってくれたので、カメラマンがステージに上がって、場違いなライトをつけたり、カメラを持って五重奏団の間をうろうろ撮影してまわっても、観客席からは「プシッ、プシッ」の非難の音が全く飛んでこなかったのはありがたかった。深夜の演奏のあと、ピアソラと話した。

「僕の音楽がタンゴでないというのなら、それはそれで構わないんだよ」

「“ムシカ アルヘンティーナ”でもいいし、“ムシカ ブエノスアイレス”でもいい。何と呼んでくれてもいいんだよ」

「ただ僕は、ブエノスアイレスの人々の喜びと悲しみと悩みを謳って行きたいんだ。

「僕の心はタンゴ。僕の作る音楽はタンゴなんだ」。深夜の演奏を終えピアソラは、いさか疲れてはいたが、熱っぽく現代タンゴへの思いを語った。

1998年。ピアソラと出会ってから28年経っている。東京公演の歌姫ミルバは、ピアソラの心を見事に歌い上げて熱唱であった。ダニエル・ビネッリ五重奏団との共演であった。ビネッリの作曲になる「フーガと復活」「女ブエノスアイレス」「去り行き人々」は、ピアソラの音楽を偲ばせる芸術性の高い素晴らしい音楽であると私は思った。多勢のタンゴファンからの痛烈な批判にもくじけることなく、タンゴの芸術性を高めようと、颯爽と現代タンゴの旗を振ったピアソラの心が、彼の死後も、ビネッリという才能に脈々と受け継がれていることに、私は深い感動を覚えた。

現代タンゴは、ピアソラと共に突然出現したわけではない。ブグリエーセもトロイロも、伝統タンゴには飽き足らず、彼等なりの新しいものを目指していた。しかし、ピアソラは、その改革をダイナミックに進めた。幼少の頃からニューヨークで異文化と出会い、ジャズに親しみ、パリで本格的にクラシックの作曲を学ぶというピアソラの幅の広さと背景の深さ、彼の音楽に対する情熱が、この改革の基盤になっていると、私は思う。

私の手許に、1枚のスペイン語の領収書がある。「取材料150ドル、NHKより受領。1970年12月25日」アストル・ピアソラとサインしてある。ミケランジェロのどこかの片隅で、「何か紙ないかい」と言って、ピアソラが私の持っていた万年筆で書いたものだ。この紙が今語りかけてくる。「セニョールカラサキ、俺のタンゴはどっこい生きているだろう」（完）
(当協会理事、元NHKブエノスアイレス支局長)

新著紹介 「アルゼンチンと日本—友好関係史 ホセ・サンチス・ムニョス著

アルゼンチンについて日本で書かれた本、日本についてアルゼンチンで書かれた本は多い。しかし、両国関係と両国民の交流を広い視野からまとめたものは本書が初めてである。著者は現アルゼンチン駐日大使の職にある。職業外交官として日本に2度にわたって8年以上滞在する知日派であり、また、一時母国の大学で国際関係論の教授をつとめた経歴もある。このような著者の経歴から生まれた本書には古い外交文書や未刊行の資料もふんだんに使われている。

記述は、日本海海戦で活躍した2隻の軍艦がアルゼンチンの好意で直前に日本に譲渡された経緯から、経済交流、音楽、文学、移住、人的交流、タンゴが日本に入ってきた経緯まで全般にわたり、一つ一つが正確な資料と行き届いた調査に裏づけられている。記述の詳細は目を見張るばかりであり、丹念にフォローした日本人移住者の歴史には改めて教わることが多い。

本書が紹介する在横浜領事館が本国に送った貿易に関する報告書は、「日本の経済政策の保護的性格が輸入貿易の抑制原因となっている」「日本との貿易は日本語と日本式の交渉を好む」とある。90年前の明治40年の報告である。その観察の的確さと現在の状況を重ね合わせると背筋が寒くなる。

本書は日本とアルゼンチンの関係に絞られており、著者は、両国関係を終始好意的にとらえ、両国の関係の将来に期待を寄せている。アルゼンチンを語ろうとするものには必携の書である。

監訳の労をとられた高畠敏男元ボリビア大使に敬意を表したい。惜しむらくは、そして仕方のないことであったが、おびただしく登場する日本人の名前の表記が、何人かは原著のスペイン語から読み取ったカタカナのままになっている。これは翻訳を担当された以外のものもみんなが協力して漢字名を持ち寄り、この大事な文献を少しづつでも完成させて行くしかあるまい。
(河崎勲理事)

発 行：日本貿易振興会（ジェトロ）1998年11月初版

定 價：2,520円（本体価格2,400円）

入手方法：(1) ジェトロ・ライブラリー（港区虎ノ門2-2-5共同通信会館6F）
で販売（09:00～16:30、土日祝、第3火曜日定休）

(2) 東京官書普及(株)通信販売課を通じて通信販売。

TEL 03-3292-3701、FAX 03-3292-1670

当協会事務所の移転

当協会は来る2月27日（土）より、下記に移転することになりましたので、お知らせ申し上げます。（なお、旧事務所より徒歩120メートル）

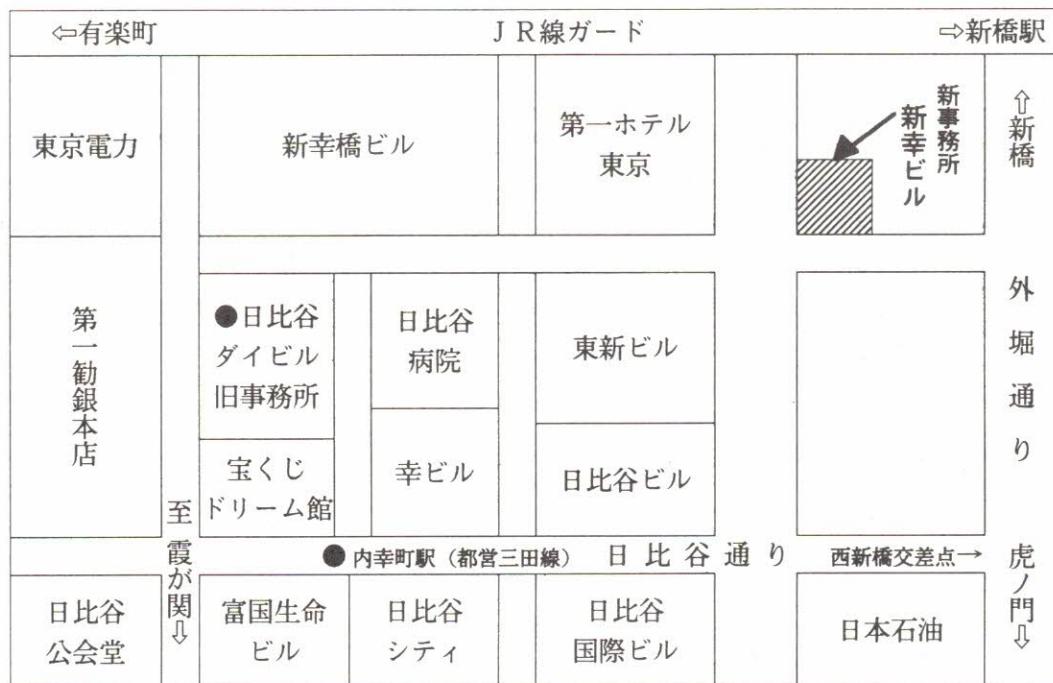
新住所 〒105-0004

東京都港区新橋1-17-1 新幸ビル3階

電話番号 東京 03-3501-4684

FAX番号 東京 03-3595-3932

なお、番号は従来通りで変更ありません。



文 化 行 事

【】は当協会員特別割引

□狂熱のバンドネオン小松亮太（ゲスト／ポーチョ・パルメル）

日 時：2月12日（金） 19:00 開演

13日（土） 14:00 開演 及び 19:00 開演

14日（日） 14:00 開演

場 所：草月ホール（港区赤坂7-2-21 草月会館）

入場料：4,500円（全自由席）【□ 4,000円】（全自由席）

交 通：地下鉄銀座線、半蔵門線 青山一丁目駅 下車徒歩5分

主 催：草月アートプランニング（株）

連絡先：TEL 03-3403-5278 FAX 03-3403-6921（北原、星田）

□ フォエバー・タンゴ（ブロードウェイでロングランヒット）

日 時：2月23日（火）～26日（金） 19:00 開演

27日（土） 14:00 開演 及び 18:00 開演

28日（日） 13:00 開演 及び 17:00 開演

会 場：青 山 劇 場（1,200席）

出 演：フォエバー・タンゴ楽団（11人）、ダンス7組、歌ボーカル（1人）

入場料：全席 10,000円（税込）【□ 9,000円（税込）】

交 通：地下鉄銀座線、千代田線、半蔵門線 表参道駅B2出口 徒歩8分

主 催：テレビ朝日 後 援：アルゼンチン共和国大使館ほか

連絡先：青山エンタープライズ TEL 03-3404-9111（井本）

□ アルゼンチン・フィエスタ

池袋サンシャイン・シティワールド・インポートマート（7階）で去年10月21日より25日の5日間次の2会場で、アルゼンチン・フィエスタが同実行委員会（当協会、サンケイ新聞社、ロスピノスⅡアジア（株）の）主催で行われた。

第1会場：アルゼンチン写真展（写真家岩下守、フリーライター滝野澤優子提供）及びワールドカップ「日本対アルゼンチン」の報道写真展を開催。ワイン輸入業数社による試飲、展示、即売が行われ、その外CD、ビデオ、書籍等が販売された。

第2会場（日替わりエンターテイメントとセミナー）：

パジャドール高野太郎が案内する「アルゼンチン音楽の旅」でタンゴ・フォルクローレの楽団、岡本昭とタンゴ・グループ、大塚典とタンゴトリオ、オルケスタ・チェ・タンゴなどが日替わりで2回出演した。

演奏会の合間には、セミナーとして、タンゴの踊り方、アルゼンチンワインの大研究、アルゼンチンの花とガーデニング、日ア100年の盟友、さらにア国内をオートバイで回った滝野澤優子の体験談及びフランス・ワールドカップを実況放送した山本アナと水沼貴史解説者とのトークショーが日替わりで行われた。

なお、特別出演として、駐日アルゼンチン大使館と60余年の友好親善関係を有する長田小学校（茨城県猿島郡境町）児童350人がタンゴカミニートを齊唱

し、アルゼンチン・フェスタをなお一層盛り上げ、5日間で8,000人の来訪者が
あった。

(註: □印は日本アルゼンチン修好100周年記念事業)

お 知 ら せ

◎新刊書のご案内

1. 永住と帰化 (RESIDENCIA PERMANENTE Y NATURALIZACION)

松本ファン・アルベルト(当協会員)合資会社イデア・ネットワーク代表が、第2章ビザ取得の基準と手順、第3章永住権の取得、第5章帰化などについてスペイン語で出版しましたので、ご関心の向きは下記へご連絡願います(当協会に見本あり)。

定価2,500円(税込、送料別)を会員特別価格2,200円(税、送料込)

郵便振替 00220-0-86013

TEL 045-544-0192・FAX 045-544-0079

定価2,200円を会員特価1,400円(送料込)。(会報第20号参照)

2. 日本アルゼンチン交流史

日本アルゼンチン修好100周年記念事業の有終の美を飾る「日本アルゼンチン交流史」を目下同事業組織委員会(当協会に設置)が3月発行(2,000部)をめざし、編集、校正を行っております。

内容は、日ア関係100年の歩みと展望を32人の執筆者により、第1部100年の外交関係の歩み、第2部経済関係、第3部移住関係の推移、第4部多様な文化交流(タンゴ、スポーツ等)第5部両国関係の今後の展望の5部構成(約400頁)にまとめましたので、ご期待下さい。

◎アルゼンチンタンゴの旅

日 程:

4月24日(土) 成田発 5月3日(月) ブエノスアイレス発

25日(日) ブエノスアイレス着 同(日) モンテビデオ着

27日(火) 同 発 5日(水) 同 発

同 コルドバ着 7日(金) 成田着

29日(木) 同 発

同 ブエノスアイレス着

費 用: お一人様¥488,000円

連絡先：江戸川タンゴクラブ会長 大橋雄一（当協会員）
TEL 03-3650-3740

取り扱い：(株)旅行俱楽部 渋谷区鷺谷4-11 TEL 03-3463-6090

◎ホームページの一時閉鎖

当協会の移転に伴いインターネット接続等の諸手続き及び経費の関係で一時閉鎖することにしましたのでご了承願います。

人 事 往 来

(98年10-12月)

1. 訪 ア

松永国際問題研究所理事長 10月19、20日

気候変動枠組み条約第4回締約国会議代表団

(真鍋環境庁長官、大木日本政府代表、愛知衆議院議員、小杉衆議院議員、堂本参議院議員、岩佐参議院議員、福山参議院議員、広中参議院議員、山本衆議院議員、小澤潔衆議院議員他) 11月上旬

群馬県議会議長 11月11-14日

大阪商工会議所中南米使節団 12月11-14日

2. 来 日

メネム大統領（国賓、12月1-4日）

(ディ・テラ外相、フェルナンデス経済相、コーラン大統領府長官他随行)

3. 離 任

ホセ・R・サンチス・ムニョス駐日アルゼンチン大使、同夫人 1月23日

あとがき

次号（24号）は4月中旬発行予定です。会員各位の投稿、ご意見をお待ちしています。